

屋号	辰川自主防災会	氏名	代表：矢野武彦
題名	防災を通じて障害者との共生を考える		
期間	2023年9月25日～2024年8月31日		
<b>概要</b>			
本プログラムでは、毎年開催している防災訓練に加えて、障害等と共に暮らす住民への平時からの理解と近隣住民同士の支え合いを促進するために、アンケート調査と講演、アンケート結果を踏まえた備えの強化、防災新聞の発行による情報共有を実施した。本プログラムは、日常生活では可視化され難い「助けが必要」という声なき声があることを地域全体で理解を深める一助となった。			
<b>内容</b>			
毎年実施している防災訓練を軸として、下記の内容を実施した。			
<b>1. アンケート調査</b>			
普段の暮らしの中では知り得ない、知らせたくないかもしれない障害等について理解を深めるために、障害のみに焦点を絞るのではなく、災害時の要配慮者まで範囲を広げて調査することで声をあげやすくした。また浅く広くとも互いに「助けてほしい・助けるつもりがある・支えが必要な自分にも皆のためにできることがある」とこの理解を深める内容となるよう考慮した。アンケートは回覧板を利用して配布し、無記名かつ厳封での回収、回収日は防災訓練当日を基本とした。辰川自主防災会に加入している90世帯中、67世帯（74%）から回答がなされた。様々な理由で家族だけでは避難が困難な世帯の存在や理由、どのような手助けが必要か、どのような手伝いができるか等を情報共有する機会となった。アンケート内容及び結果の詳細については別紙参照。			
<b>2. 講演</b>			
4月7日に開催した防災訓練では、住民約240名中124名の参加があった。例年の訓練で参集訓練の後、各自が自宅に備えている「無事ですカード」の掲示による安否確認訓練、講話やタウンウォッチングを実施しているが、今年度は日頃から障害者等に接し、代弁者としての役割も担っている講師による講演を実施した。講師は2018年に発生した西日本豪雨災害にて甚大な被害が発生した地域の一つである岡山県倉敷市真備町で、訪問看護・訪問介護の事業に従事し、被災直後から地域を支える活動を継続している看護職の片岡奈津子氏に依頼した。同氏からは、ご自身の被災体験とともに、医療的なケアが必要な住民への支援事例や精神疾患を抱える住民だけでなくその家族への支援が必要なこと、認知症を発症している独居高齢者の夜遅くの避難を地域住民が積極的に行なったことの紹介等がなされた。講演の様子は別紙参照（防災新聞）。			
<b>3. 備えの強化</b>			
本プログラム申請時は、辰川集会所に設置していないスロープの購入を検討していたが、複数の住民が自宅にスロープを所有していることがわかり、アンケート結果を踏まえ、より有益な備えを進めていくこととした。アンケート結果では、皆が最も心配していることは「トイレ」であった。災害時には、障害等と共に生きる住民を支える役割が求められる住民も被災する。支援者支援を行うことによって、地域の皆での支え合いがなされる必要があるため、より多くの住民が利用できるトイレの備えを強化することにした。備品購入の際には、一般的には非常用トイレではなく、座面が広く手すり設置できる組立式のポータブルトイレとした。また様々な理由で集団生活となる避難所には避難できない住民に配布しつつ声かけできるように、携帯トイレも合わせて備蓄した。なお、備蓄内容の詳細は防災新聞にて周知した。本プログラム申請時は辰川自主防災会に加入する全員が構成員となっている飯岡校区自主防災会が運用予定の避難カードに要支援を知らせるマークをつけることを検討していた。しかし、避難カードの提出先として予定されている避難所を運営する組織全体での周知がなされないと有効でない可能性があるため、マークをつけることは実施に至らなかった。一方、飯岡校区自主防災会で配布準備予定であった避難カードについて、留意事項や連絡先に必要事項を書き込みやすいよう記載内容についての提案を行なった。4月7日の防災訓練時には提案内容を踏まえたカードが配布され、訓練に参集できなかった住民へも別途訪問し配布した。			
<b>4. 防災新聞の発行</b>			
防災新聞には、アンケート結果、防災訓練の様子、トイレの備蓄等を内容として作成した。より伝わりやすいよう、カラー印刷とした。皆で課題を共有できたことを賛辞する声が複数寄せられた。なかには障害と共に生きる住民家族からの賛辞や労いの声もあり、本プログラム実施の意義が一定程度あったと考えられる。			
<b>課題・問題点</b>			
障害と共に生きるということへの理解を促進するには、一度のイベントでは不十分であることは明白である。防災に限らず、様々な機会に理解を促進し得よう、堅苦しくならず皆が関心を持ち続けてくれるような方法を検討していく必要がある。			
<b>今後の活動・対策</b>			
継続的な活動のためには、皆が参画しやすくなるような配慮が必要である。今は支える側・支えられる側のどちらかしかないと思っている人々にとって「お互いさま」と思い合えるよう、防災訓練以外の活動の中でも楽しくも温かい支え合いを継続していく。			



# つなぐ、あの日を今に

## 東予東部豪雨災害20年

20年前の豪雨被災地域を 恒例行事。訓練後は花見し 中心に自助、共助の意識が ながら近況を話し合う。

高まり、主に自治会単位で 病院や施設に入る高齢者 自主防災組織が相次いで結 が増え、世帯人数が大きく 成された。ただ現在は住民 変動する中「誰がどこに住 の高齢化や自治会加入率低 んでいるのか知っているの が課題。全世代に参加を は重要」と矢野武彦会長。 促したり、組織を統合した 会話を通じて効率的に助け りと、命を守る活動の幅を 合える素地ができるとい 広げている地域もある。

2004年災害で多くの は自治会員の半数を超える 家屋浸水被害を受けた西条 125人が参集した。

市飯岡の辰川地域では、2 各戸の安否を速やかに確 年後に「自主防災会」が設 認する「無事ですカード」 立された。結成直後から取 も運用している。看護師の り組む避難訓練は、地域の 趙由紀美さん(46)が県外の おくだけでいい」と呼びか れに手間取ると、避難支援 室川沿いの桜が咲く時季の 事例を基に手作りして全世 けてきた。「発災時、最初 や復旧作業が遅れていく」。



活動を振り返る辰川自主防災会のメンバー。無事ですカードの 運用も、かなり定着してきたという—9月21日、西条市飯岡

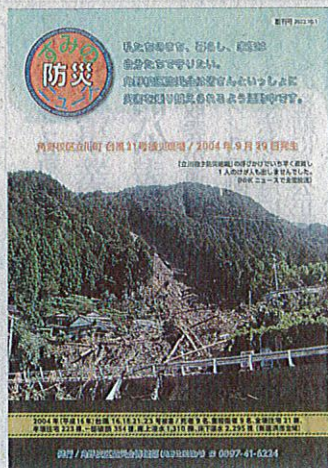
### ⑤ 自主防災組織

## 住民連携へ活動を模索

帯に配布。「玄関に掲げて に必要なのが安否確認。そ れに手間取ると、避難支援 けてきた。「発災時、最初 や復旧作業が遅れていく」。

約5500世帯、約1万 部、情報部など7部門に分

毎年訓練時は防災会役員 1千人が居住する新居浜市 角野校区では16年、全48自 治会合同の「校区防災会」 が発足した。豪雨災害後に 生まれた自主防災組織を結 集。伴野公博会長(79)に ラムなどを載せ、24年3月 まで計4回発行した。防 災会の狹山陽志副会長(79) は「ひどい目にあつたから こそ、いつまでも覚えてい て備えたい」。自治会に加 入していない世帯にも届く よう、学校やPTAを通じ ても配っている。「誰も取 り残さない」(伴野会長) まちを指し、一人一人に 目配りし続ける。



角野校区防災会が発行する 「すみの防災ニュース」

行政がつくる防災マップ を単位自治会ごとに細分化 した独自版を16年から順次 作成している。避難経路や 消火栓の位置とともに、要 援助者らの住所なども許可 を得て掲載した。毎年秋の 訓練には大勢が参加してお り、住民間の連携は強まっ ている。

さらに風化を防ごうと、 情報部は22年に「すみの防 災ニュース」を創刊。フル カラーで過去の被災写真や 活動の様子、防災のミニコ ラムなどを載せ、24年3月 まで計4回発行した。防 災会の狹山陽志副会長(79) は「ひどい目にあつたから こそ、いつまでも覚えてい て備えたい」。自治会に加 入していない世帯にも届く よう、学校やPTAを通じ ても配っている。「誰も取 り残さない」(伴野会長) まちを指し、一人一人に 目配りし続ける。

(東予東部豪雨災害20年取 材班)